

校長だより

福津市立福間東中学校

校長 猪股 清貴

平成 28 年 9 月 23 日 No29

少年の日の思い出 ～本物が持つ迫力～



ドイツのノーベル文学賞受賞作家ヘルマンヘッセの「少年の日の思い出」は保護者の皆様にも記憶にある話ではないでしょうか。もう何十年と教科書に掲載されている作品ですね。夕闇迫る私の書斎で客が語る少年の日の思い出。客が「実際、話すのも恥ずかしいことだが・・・」と前置きをして話し始めた少年の日の思い出に読者はぐいぐいと引き込まれていきます。「どうして話すのも恥ずかしい話なんだろう?」「今でも身にしみて感じる熱情ってどんな気持ちなんだろう?」「そこまで、少年の心を取りこにしたチョウってどんなもの

なんだろう?」いろんな謎解きの面白さもあるし、何ととっても主人公の少年が中学生とあまり変わらない年頃であることから、つつい物語の中に引き込まれていったものです。

そこで、今回「少年の日の思い出を振り返ろう」というテーマで、2年生の授業にチョウ採集の名人をゲストティーチャーとしてお呼びしました。来ていただいたのは一昨年まで福間中学校の校長をしておられた田中隆義先生です。先生は郷育カレッジの講座を担当されるほど生物学、特に昆虫に対する造詣が深く、たくさんの標本も持っておられます。授業でも、標本を示しながらチョウや昆虫の魅力について話をしてくださいました。少年の心を取りこにした「クジャクヤママユ」ってどんなチョウなんだろう? 「チョウ」と言ってもこれ「ガ」じゃないの? といった疑問もすっきり解けました。ドイツではチョウとガは「昼のチョウ」「夜のチョウ」と呼び、日本のような呼び名の違いはないそうです。また、主人公を魅了した「クジャクヤママユ」はフランスやドイツを中心に生息し、ヨーロッパではワシントン条約で採集も取引も禁止されている大変貴重な品種だということです。その貴重なチョウの標本がどうして手に入ったか。これも興味ある話でしたね。

原作の一部を紹介します。

とび色のピロードの羽を細長い紙きれで張り伸ばされて、クジャクヤママユは展翅板に留められていた。僕は、その上にかがんで、毛の生えた赤茶色の触角や、優雅で、果てしなく微妙な色をした羽の縁や、下羽の内側の縁にある細い羊毛のような毛などを、残らず間近から眺めた。

まさに、ピロードの羽が張り伸ばされた標本でした。下羽の内側にある細い羊毛のような毛もはっきりと見ることができました。これも、本物が持つ迫力です。

